

国家試験合格率は謎が多い “入学者の7割が合格”は誤解？

旺文社 教育情報センター 2018年6月

3月初旬から医師・歯科医師・薬剤師等々の国家試験の合格発表が行われ、各大学等ではその合格率をホームページのトップに掲載するなど、大学の教育成果としてアピールをしている。一方、大学受験生にとっても国家試験の合格率は大学選択の大きな要因のひとつとなっている。しかし、入学した学生がストレートに国家試験に合格したかは、試験種によって謎が多い部分も見られる。ここでは薬剤師国家試験を例にとって探ってみた。

■薬剤師国家試験の直近の合格状況

まず、受験資格についてみると、

①大学において正規の薬学の課程（以下、「6年制薬学課程」という）を修了して卒業した者

②外国の薬学校を卒業し、または外国の薬剤師免許を受けた者で、厚生労働大臣が①と同等以上の学力および技能を有すると認定した者、など

となっている。大学を“卒業”しないと受験資格を得られない。そこで2018年の試験結果（2018年3月公表：第103回）をみると、

・受験者数（新卒・既卒の合計）＝13,579人、合格者数＝9,584人、合格率＝70.58%と、70%を越す合格率であった。近年の合格率の推移をみても、2014年60.84%→2015年63.17%→2016年76.85%→2017年71.58%と、60～70%台で推移している。なお、2016年の合格率は、2015年の60%台から70%台にアップしているが、これは2016年に実施の試験から新たな合格基準（必須問題で各科目の基準点が下げられたことや、一般問題で各科目の基準点が廃止されたこと⇒絶対評価から相対評価となった）が適用されたことが大きな要因のひとつである。

さらに2018年の6年制卒業者の結果を新卒・既卒別にみると、

・新卒 ⇒ 受験者数8,606人、合格者数7,304人、合格率84.87%

・既卒 ⇒ 受験者数4,577人、合格者数2,151人、合格率47.00%

と、新卒が圧倒的に高い合格率となっている。資格志向の強い大学受験生には心強い結果となっている。

※2018年の受験結果は旺文社教育情報センターHP参照。→ http://eic.obunsha.co.jp/2018_kokushi/

※薬剤師の資格については螢雪時代6月増刊「進路決定 資格・検定・職業ガイド」等参照。

■合格率とは

ここまで述べてきた「合格率」とは、「受験者に対する合格者の割合」を示す。6年制薬学課程学生の合格までの流れを大雑把に見ると次のようになる。

入学 ⇒ 進級 ⇒ (4年次後期) 共用試験2種<CBT(薬学の基礎・専門科目に関する客観試験)、OSCE(客観的臨床能力試験)>の試験に合格 → 5年次進級(実務実習等を含む) ⇒ 国家試験出願 ⇒ 卒業 ⇒ 国家試験受験・・・合格

各年次で進級できず留年する場合もあり、また出願していても卒業できない場合もある。したがって、新卒の合格率は、入学者全員がストレートに卒業して受験した場合を意味するものではないということに注意する必要がある。そこで出てくる問題点として下記の3点について見てみる。

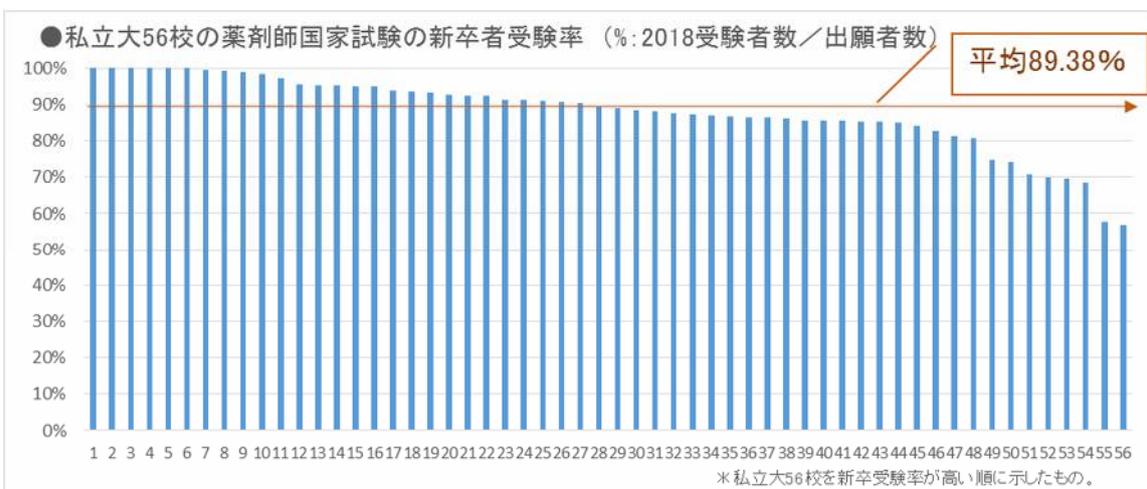
■合格率に潜む問題点

①新卒で1,000人近い未受験者が出現！

まず、薬剤師国家試験に出願したが、卒業できなかったことなどで受験しなかった(受験できなかった)学生はどの程度いたのだろうか。厚生労働省が公表している2018年の薬剤師国家試験の合格状況の資料では、受験者数だけでなく“出願者数”も記載されている。この資料から、学校種別の受験率(受験者数/出願者数)の平均をみると、

- ・国立大(14大学) 受験率=全体95.44%、うち新卒は98.15%(前年は98.32%)
- ・公立大(3大学) 受験率=全体98.66%、うち新卒は99.56%(同98.64%)
- ・私立大(56大学) 受験率=全体90.92%、うち新卒は89.38%(同87.21%)

となっている。私立大の新卒では10%程度(939人、前年は1,115人)もの出願者が未受験であった。この私立大56校の新卒者の受験率は、下図に示すとおり、100%が6校、90%台が21校、80%台が21校、70%台が4校、60%台が2校、50%台が2校と、大学によりかなり幅があることがわかる。国公立大を合わせて1,000人程度の新卒が未受験者である。



②国家試験受験者の「新卒比率」は平均 60%台

次に私立大の国家試験受験者における新卒者比率（新卒受験者数／総受験者数）を見てみる。私立大 56 校の受験者中に占める新卒者率の平均は 62.5%であった。その内訳は、90%台=1 校、80%台=11 校、70%台=10 校、60%台=7 校、50%台=14 校、40%台=7 校、30%台=2 校、20%台=4 校であった。新卒者率 20%の大学では、受験者の 80%が、前年まで不合格だった既卒生の再挑戦ということの意味する。また、ここで言う「新卒者」の中には留年した者が卒業した場合も含まれていることに注意したい。そのため、新卒者には 6 年前の入学者より多くの受験者が存在する場合も出てくる。結果として入学者の“真のストレート合格率”は謎のままである。

③入学者のストレート卒業率が 20%台の大学も

では私立大の入学者のストレート卒業率はどうなっているのだろうか。そこで押さえて置きたいのは、私立大 6 年制薬学課程の進級・卒業には主に 3 つの関門があるということ。

- ①1～2 年次の基礎学力不足による留年・退学（「同一学年に 2 年間を超えて在籍できない」などの学則）
- ②実務実習（5 年次）前に行われる共用試験（特に CBT）に向けての演習試験不合格 → 留年
- ③国家試験に向けての総合演習科目の試験、いわゆる「卒業試験」不合格 → 卒業延期

こうした 3 つの留年等のパターンを念頭に置き、文部科学省の資料（「平成 25～29 年度の入学試験・6 年制学科生の修学状況」）をみってみる。少々前の資料だが、ここには入学者の進級度合（入学時→5 年次→実習修了者→卒業生）が掲載されている。それによると、平成 23 年度入学者のストレート卒業率（ストレート卒業生数/入学者数 ※5 年次進級時の算出では、留年・休学者と編入学者を除く）は、80%台=8 校、70%台=7 校、60%台=12 校、50%台=14 校、40%台=9 校、30%台=4 校、20%台=2 校などとなっており、上記の国家試験受験者の新卒比率と同様に、低い数値の大学も散見されている。

■大学受験生にもわかりやすい情報提供を

国家試験の受験に関しては、受験当日の受験者の体調不良等による未受験もあり得るが、学力不足による受験回避（受験者本人あるいは大学の意図による）が大きいと見られる。入学から進級ごとに学生が減り、最終的に合格可能性の高い学生が受験し、結果的に合格率がアップするような場合も生じているようだ。

情報公開が進む中で、入学年度別進級者数等を公表している大学もあるが、大学のホームページの中で探しにくい場合も多い。しかし、国家試験の合格率が大学（学部・学科）選択の大きな要因となっている現在、入学者のうちどの程度の学生がストレートに国家試験合格を勝ち取るのかなど、大学受験生に対し一層のわかりやすい情報公開が望まれる。当然、大学受験生も入学後の学習がかなりハードなものと覚悟する必要がある。

なお、ここまで薬剤師国家試験の状況を例に見てきたが、他の国家試験受験については状況が異なり同一に論じることはできないのでご留意いただきたい。（2018.06 常盤）